



## 不治の眼病 4 半世紀

20 理甲 1 滋賀大学名誉教授

岡本 巖

近所で歩道を歩いていて人に出会う。たいていこちらが年かさだから、会釈をされる。「どなたでしたか」と問えば、「あら、まあ、さきほどお会いしたばかりじゃありませんの」と不審がられる。すれ違ったぐらいでは、こちらは何も見えていないのだ。先方は数 10m 前から「岡本さんが来る」と分かっているだろうから、それなりに心の準備もできていよう。が、こちらはただドギマギ、うろたえるのみ。近年少し外出嫌いになったようだが、そのためか。

### 緑内障と診断されて

私は緑内障に加えて強度の近視。中学 4 年生のころからすでにメガネをかけていた。私の生国薩摩は古来尚武の国、先輩たちはこぞって陸士・海兵へ進学していた。ところが、陸軍も海軍も入試では視力検査が厳格であった。私の近視を心配した父親は、毎夜雨戸を明けて縁側から星を見る私の行事に、よく付き合ってくれたものだ。数少ない父の思い出の一つである。しかし、父子の悲願も空しく、視力は遂に回復することはなかった。やむなく七高への転進となったのだった。こちらは視力を問わない。

そして今度は緑内障、またしても眼病だ。ただ緑内障は近視問題の 40 年ほど後、60 才前後のこと。ところで緑内障は近視よりはるかに手ごわい。近視はメガネでしのげるが、緑内障はそうはいかない。こちらは視野が次第に狭くなり、しかも一旦失われた視野は生涯回復することはない。きわめて厄介な眼病である。高い眼圧のため視神経が圧迫され、萎縮衰微していくのだという。

白内障も緑内障と並んで、高齢者眼病の双璧だが、こちらは比較的簡単、白濁した水晶体を取り除き、代わりに人工の水晶体を挿入するだけ。通常は入院もせず、日帰りである。

これに対して私の緑内障の場合、入院は計4週間。第1週は目を中心とした全身の機能検査。当時の私の眼圧は高いといっても21(mmHg)ほど。この程度の眼圧では正常な人もいるから、あるいは夜間睡眠中に上昇することもあるかもしれないとあって、4時間ごと24時間の連続検査となった。結果は昼夜変わらず21、若干低眼圧性の緑内障と診断された。精密な視野検査の結果はゆるがなかった。

そして第2週は左眼の手術、第3週は右眼、第4週は予後検査、退院。緑内障の手術は眼圧を下げるためのもので、房水の排出を助けるため、排出部を切り拓げるものだ。

### 入院は七高水泳部の連携プレー

話は前後したが、入院に至るいきさつを語っておきたい。まず鮫島三郎兄。彼は七高同期、当時わが水泳部のキャプテン。彼のクロールは独特のハイピッチ泳法、強力ビートと合まって、抜群の快速だった。話はその後40年、60才前後のころのこと。わが家に泊まったその翌朝、私の眼病のことを知り、これまた同じ七高水泳部の湖崎君(故人)の存在を教えてくれた。早速湖崎眼科に連絡し、週1回、JR大阪駅構内の分院に出張する機会に診てもらった。果たして緑内障と診断し、帰りぎわ滋賀医科大眼科宛に紹介状を書いてくれた。それ以降、医大における私のカルテには、常にこの紹介状が添付されていたようである。大阪眼科医師会長の彼の名は、滋賀地方でもよく知られていたようである。

### 入院中のできごと二つ

その一つはいびき、二つは空ビン。先ずいびき。私は生来いびきが大きい。ある日畏敬する婦長に廊下へ呼び出され、「あなたのいびきで同室の皆さんが困っている。眼科から少し離れているが、外科病棟に個室が空いているから、そちらに移ってほしい。個室料は不要」と。私は喜んで移った。以後、安心して高いびきを続けることができた。誰にも遠慮のない高いびきは何より幸せである。

次は空ビン騒動。烈しい雨の日だった。パトカーのサイレンとともに、交通事故の急患が入院してきた。またしても個室をかわってほしいとの申し出。面倒だが、やむをえないと、室内の荷物をまとめようとしていたら、「ベットに伏せたままベットごと移動します。荷物はその後で」と。伝い歩きはできるから、歩いて移りたいと主張したがダメ。ベットごと移動となった。ところがベットが動いたとたん、その跡には何とウイスキーの空ビンがゴロゴロ。婦長は呆れ果てて、怒ることも忘れていたようだった。私が持ちこんだものもあるが、大部分は見舞いの学生たちが持参したものであった。

### 緑内障とともに

現在視力は、左眼は何とか明暗が分かる程度のほぼ全盲。右眼はメガネをかけて視力表の最上段の0.1が見えず、眼前2mほどに近づけてもらって何とか識別、0.075であ

る。

不治の眼病とはいえ、いまも毎月眼科に通院している。この眼科のドクターはかつて私の緑内障の手術を担当された主治医、手術の結果、眼圧はみごとに 18 に下がり、18 で安定している。思えば、もう 20 余年のおつきあい。私の目に関してはスミからスミまで知悉しておられる。大いに安心である。

ところで緑内障はうす暗いのが苦手である。私の部屋では、天井からぶら下がる電灯のコードを伸ばしてもらって机上 1.5m に。電気スタンドは自在アームタイプ。読書や執筆に合わせて、そのつど電灯の位置と向きを容易に変えることができ大変便利である。

新聞は昔から朝日と京都だが、いまは見るのは見出しだけ。両紙とも見出しがうまい。見出しだけで十分である。「天声人語」や「凡語」を読んでいたのはもうかなり以前のことのようだ。

目が悪くても暗いことばかりではない。私は視覚障害者福祉協会の会員。毎月彦根市のセンターから機関紙「星光」が届く。大活字で読みやすい。文学作品や旅行記などの CD 版の貸出しもある。かつて童門冬二の「近江聖人中江藤樹上下」の CD 版で感動したことがある。いまは野村克也の「ああ、阪神タイガース」の CD 版。女性の朗読もすばらしいが、何より読む苦勞がいらぬのが有難い。

また、先月、「全国盲人福祉大会東京大会」に参加したが、その準備も進行も実に整然としていた。2泊3日のやや強行軍だったが、エキスカーションで伊豆大島へ渡ったのがよかった。波浮港を訪れ、名曲「波浮の港」をテープに合わせて口ずさんだことが深い印象となった。